

論文種：

報告

表題：

基礎看護学実習 I(生活援助技術の実践)を履修した学生の看護観
～テキストマイニングを用いた分析を通して～

論文執筆者名・所属：

北島 元治¹、尾崎 道江¹、宮下 真理子¹、佐藤 圭子¹

¹ つくば国際大学 医療保健学部 看護学科

連絡責任者：

氏名：北島元治

住所：〒 300-0051 茨城県土浦市真鍋 6-20-1 つくば国際大学
医療保健学部看護学科

TEL：029-826-6622

FAX：029-826-6776

E-mail：g-kitajima@tius.ac.jp

要旨：

本研究の目的は基礎看護学実習 I(生活援助技術の実践)を履修した学生の実習後レポートから看護観を明らかにすることである。研究対象は令和 6 年度基礎看護学実習 I(生活援助技術の実践)の単位を修得し、研究協力依頼に同意が得られた看護学科 2 年生 17 名である。実習後レポートから看護観を表す記述を抽出しコード化した上で、テキストマイニングの手法を用いて分析し、類似するサブグラフを統合し命名した。その結果、看護観は《対象理解の重要性》、《個別性に合わせた看護技術の必要性》、《患者状態のアセスメントの必要性》、《安全・安楽な看護技術の重要性》、《情報共有の大切さ》の 5 つに大別され、従来の知見が支持された。先行研究を踏まえ看護観を育成するためには、教員間、指導者間だけでなく、指導者以外の看護師とより協働して指導すること、講義・演習科目の授業内容を、より臨床の場がイメージできるように洗練することが必要と考えられた。

キーワード：

基礎看護学実習 I、看護学生、看護観、テキストマイニング

英語表題：

Nursing Students' Views on Nursing after Completing Basic Nursing Practicum I (Daily Living Support Skills): An Analysis Using Text Mining

論文執筆者名と所属（英語）：

Ganji Kitajima¹, Michie Ozaki¹, Mariko Miyashita¹, Keiko Sato¹

¹ Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Tsukuba International University

Abstract：

This study aimed to understand nursing students' views on nursing after completing Basic Nursing Practice I (Daily Living Support Skills). The participants were 17 second-year nursing students who finished the course in 2024 and agreed to take part in the study. Their post-practicum reports were used as data. From these reports, sentences that showed how students viewed nursing were selected and coded. The data were analyzed using text mining, and similar ideas were grouped and named. As a result, five main ideas were found in the students' views on nursing. These were the importance of understanding patients, the need to provide nursing care suited to each individual, the necessity of assessing patients' conditions, the importance of safe and comfortable nursing techniques, and the value of sharing information. It was suggested that to help students develop their

views on nursing, it is important to promote cooperation not only among teachers and clinical instructors but also with other nurses working in the clinical field. It is also necessary to improve lectures and practice classes so that students can better imagine the real situations they will face in clinical settings. By connecting what they learn in class with actual nursing practice, students may develop a deeper and more realistic understanding of nursing and patient care.

Keywords :

Basic Nursing Practicum I , Nursing Students , Views on Nursing , Text Mining

I. 序論

看護実践を支えるものが看護観であり、看護観は看護技術に表現され、看護の正しい発展には方法論や技術論のみならず看護観が必要であり、看護観なくして看護実践はできないとされている¹⁾。看護観は、学生が学校での授業や実習を通して考えられた、看護についての観かた考え方²⁾であり、看護学生は学内において看護の専門的知識・技術・態度を修得しながら、それらを臨地実習で統合し実践することで看護観を培っていくと考える。このため看護学生にとって初めての臨地実習である基礎看護学実習Ⅰは看護観が育成されるうえで重要な意味を持つ。

基礎看護学実習Ⅰ履修後の看護観についての先行研究において、実習記録とディスカッションから分析した研究³⁾では、実習記録から看護師の役割についての気づきやコミュニケーションの大切さなどの看護の基本が示されていた。ディスカッションでは指導者や看護師の助言及び患者が話してくれた内容など、学生個々の体験や思いを通して看護技術の大切さや患者の状態を判断するための根拠の重要性が表現されていた。また、基礎看護学臨地実習Ⅰで捉えた看護学生の看護観を看護観レポートから分析した研究²⁾では、実習前の学習内容が実習によって具体化され、看護観が明確になったことで学習意欲に繋がっていると報告されている。

本学の「基礎看護学実習Ⅰ（生活援助技術の実践）」（以下、本実習）では、対象者とのコミュニケーションや日常生活援助技術の見学・実践を通して看護について理解と関心を深めることを行っており、実習終了後に「看護とは何か」についてのレポートを

課している。「看護とは何か」のレポートを分析することは、基礎看護学実習Ⅰを終えた学生の看護観を明らかにすることにつながり、そこから、看護観を育成するための教育方法について示唆を得られると考える。

Ⅱ．目的

基礎看護学実習Ⅰを履修した学生の実習後レポートから「看護観」を明らかにする。

Ⅲ．用語の定義

本研究における「看護観」とは、学生が学校での授業や実習を通して考えられた、看護についての観かた考え方²⁾と定義する。

Ⅳ．基礎看護学実習Ⅰ(生活援助技術の実践)の概要

本学科のカリキュラムにおける基礎看護学実習Ⅰ(生活援助技術の実践)は、1年次後期の必修科目であり、1単位である。学生は基礎看護に関する科目として、看護学概論と基礎看護技術Ⅰ(人間関係とコミュニケーション)および基礎看護技術Ⅱ(日常生活援助技術)の単位を取得しており、基礎看護技術Ⅲ(フィジカルアセスメント)を履修している。

本実習の目的は、「看護の対象である患者と患者を取り巻く環境を理解し、日常生活の援助技術を体験する」である。また目標は、「病院の機能・概要を理解できる」、「入院患者の生活の場と、患者の日常生活を理解できる」、「学内で学習した共通基本技術、日常生活援助技術を実施できる」、「看護者としての基本的態度を

身につけることができる」、「既習の知識と実習での体験を結びつけて、『看護とは何か』について考えることができる」である。

実習方法は、学生を 4~5 名のグループに分け、病院実習 4 日間と学内実習 1 日を実施した。病院実習では、実習病院内の見学や病棟オリエンテーションを受け、教員および指導者の下、学内で学習した知識・技術を活用し、患者の日常生活援助を見学・実施している。

V. 方法

1. 研究対象

2024 年度の本実習を履修した看護学科 2 年生 28 名（男性 13 名、女性 16 名）のうち、研究協力の同意の得られた 17 名である。

2. データ収集方法

データは、学生が本実習終了後に提出した実習後レポートである。データ収集期間は 2025 年 7 月であった。2025 年の前期科目の授業日、学生全員が一同に集まった際に、研究対象者へ口頭および文書で説明を行った。その後、研究協力の同意書の提出があり、研究協力同意撤回書の提出がなかった学生の実習後レポートをデータとした。

3. 分析方法

研究代表者及び研究分担者の計 4 名は、2 名 1 組で実習後レポートを精読した上で、「看護観」を表す記述を抽出し、意味内容を損ねたり歪めたりしないように要約しコード化した。さらに、コ

ード化した内容を研究者全員で確認・修正し、全員の合意が形成されるまで繰り返した。それにより、レポートの記載内容に忠実なコード化ができるよう、妥当性の確保に努めた。

すべてのコードは、樋口が開発した KH Coder オフィシャルパッケージ Base ver.3.03a（株式会社 SCREEN アドバンスソリューションズ <https://www.screen.co.jp/as/solution/khcoder>）を用いて分析した。この KH Coder はテキスト型データを統計的に分析するソフトウェアであり、自動的に取り出したテキストデータ中の語を集計・解析することで、分析者の恣意的になりうる操作を極力避けつつ、データの特徴を確認し、要約することができる。本研究ではエクセルに入力されたすべてのコードをこの KH Coder で読み込み、1) コードの形態素解析、2) 共起ネットワーク分析を実施した。

1) コードの形態素解析

本研究では、コードに含まれる形態素、すなわち動詞・形容詞・形容動詞などの活用語をすべて 1 種類の語としてカウントしたうえで、意味を持つ最小単位の語の総抽出数および、何種類の語が含まれているかを示す異なり語数、助詞や助動詞といった一般的な語を削除した総抽出数と異なり語数、出現回数の多い語（上位 60 語）を確認した。

2) 共起ネットワーク分析

共起ネットワークは、語の出現パターンが似通ったグループを可視化するために、共起する語を線で結び、「サブグラフ」と呼ばれる色分けによって示したネットワークである。本研究では、つ

なかりを維持できる最小限までに線の数を抑えた「最小スパニング・ツリーだけを描写」を用い、最小出現数 10、最小文書数 1、描画する共起関係（edge）の選択は上位 300 に設定した。また語の出現回数は共起ネットワークの円の大きさを示し、共起の程度を Jaccard 係数で示した。Jaccard 係数は共起の強さを測るのに適した係数⁴⁾とされ、1 に近いほど共起性が強く、0 に近いほど共起性が弱いとされており、概ね 0.1 以上である程度の共起性がある、0.2 以上でそれなりに強い共起性があるとみなせるとされている。本研究では Jaccard 係数が 1 に近いほど太い線で示した。

コードの形態素解析と共起ネットワーク分析の結果について、研究責任者および研究分担者で、共起ネットワーク上の語をクリックすることで全ての前後の文脈を表示する KWIC コンコーダンスの機能を用いて前後の文脈を確認しながら検討を重ね、サブグラフに命名した。また、共起ネットワーク分析で抽出されたサブグラフの関係性の検討を重ね、類似するサブグラフを統合して命名した。

VI. 倫理的配慮

本研究は看護教育に関する研究であり、「ヘルシンキ宣言」、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」、「個人情報保護に関する法律」、その他適用される法令、条例等を参考に行った。

研究対象者に対し、研究責任者が研究の目的と意義、方法および倫理的配慮について、口頭および文書で説明を行った。文書には、調査への協力は自由意志であること、研究協力の諾否は成績に影響せず、不利益を被ることはないこと、論文での研究結果の

公表について明記した。研究協力の同意書の提出があり、研究協力同意撤回書の提出がなかった学生より、研究参加への同意を得たものとした。

プライバシーの保護として、実習後レポートをデータ化する際にタイトルと学籍番号、氏名を削除し、イニシャルと関係の無いアルファベットをつけて、匿名化を行った。

データの保管は専用の USB を用いて、研究室の鍵付きの引き出しにて保管・管理した。本研究において開示すべき利益相反はない。本研究は研究者所属の倫理審査委員会の承認後に実施した（施設名：つくば国際大学倫理委員会、承認番号：R07-8号）。

VII. 結果

履修者 28 名のうち、研究協力の同意があった学生は 17 名（男性 8 名、女性 9 名で全体の 60.7%）であった。総コード数は 327 個であり、学生 1 名あたりのコード数は 19.2 ± 7.1 個であった。全コードの総抽出語は 7,107 語であり、異なり語数は 3,218 語であった。そのうち助詞や助動詞といった一般的な語を削除した総抽出語数は 845 語であり、異なり語数は 708 語であった。

1. 頻出語とサブグラフ（図 1）

抽出語の出現は多い順に患者（236 回）、看護（108 回）、援助（91 回）、学ぶ（72 回）、コミュニケーション（62 回）、考える（59 回）、必要（55 回）、理解（50 回）であった。その他、「知る」は 21 回、「分かる」は 13 回であった（表 1）。共起ネットワークは 8 つのサブグラフで構成され、強い共起を示す Jaccard 係

数 0.2 以上の語の組み合わせは、「バイタルサイン」と「測定」、「情報」と「共有」、「生活」と「日常」および「入院」、「安全」と「安楽」、「患者」と「援助」・「看護」・「コミュニケーション」であり、最大値は 0.76 であった。

サブグラフ 01 は「看護では、食事や睡眠・休息の援助、転倒転落の予防、患者の他者から認めてもらいたいという気持ちを理解するためのコミュニケーションが重要である」、「患者とのコミュニケーションは、患者理解を深め、援助の必要性を考えるきっかけになった」、「援助の見学と体験を通して患者の生活の実際を知ることが出来た」といったコードが含まれており、【コミュニケーションや看護援助を通した患者理解の重要性】と命名した。

サブグラフ 02 は「個別性に応じた臨機応変性は、必要不可欠な看護としての要素であると言える」、「今後の課題は、患者の個別性に応じた援助の実践である」、「実習前は不安だったが、実習で患者と直接関わることで患者の立場に立った看護の大切さや看護技術の重要性を実感できた」といったコードが含まれており、【患者の個別性に合わせた看護技術の必要性】と命名した。

サブグラフ 03 は「バイタルサイン測定時に変化があった場合は、ふらつきなどを確認することが必要だ」、「腹部の痛みや、腸を触れて張りがあるのかの確認を行った」、「実習を通して、バイタルサインが異常の場合、その原因を考え、症状を患者に確認することの重要性を学ぶことができた」といったコードが含まれており、【患者のバイタルサインの値や、体調の変化を確認することの必要性】と命名した。

サブグラフ 04 は「援助の根拠や一つ一つの動作は、患者の安

全・安楽を考えて行われていることを理解できた」、「環境整備は、ただ整頓するだけでなく、安全・安楽を考え整えることが重要である」、「清潔・衣生活の援助では、健側患側・自立の程度を把握し、湯の温度などの安全・安楽に援助することが分かった」、「ベッド上の清潔やベッド周囲の整理などの環境を調整することで、患者が安全・安楽に生活できるよう意識することが重要だ」といったコードが含まれており、【清潔援助や環境整備などの援助における安全・安楽の重要性】と命名した。

サブグラフ 05 は「学内での演習と病院での援助が異なり、思うような援助ができなかった」、「学内で学んだ看護と病院での実際の看護は異なっていた」、「教科書や学内演習で学んだ援助方法は、あくまで基盤であることを初めて理解した」といったコードが含まれており、【学内での演習とは異なる病院での援助方法を見学し、学ぶことの必要性】と命名した。

サブグラフ 06 は「援助を実施しながら患者の状態、反応を観察することができるようにする必要がある」、「患者の状態を判断できなければ適切な援助が実施できないため、アセスメントが大切だと考えた」、「患者との関わりの中で、看護ではナイチンゲールやヘンダーソンが述べているように観察が大切なものであると学んだ」、「自分の症状を伝えられない患者には、観察して情報を収集することが大切であることを実感した」といったコードが含まれており、【患者の状態を観察し知ることの大切さ】と命名した。

サブグラフ 07 は、「看護は、患者が快適に入院生活を送れるように援助することだと考えた」、「患者一人一人に応じた環境整備

を行うことで、事故を防止し、快適な入院生活を過ごせるようにすることが大切である」などのコードが含まれており、【安全・安楽な入院生活への援助】と命名した。

サブグラフ 08 は「看護師は患者の情報を、看護師間、薬剤師、理学療法士、医師と共有し、連携していた」、「個別性のある看護を提供するために、情報を共有し、チーム全体で観察する必要がある」といったコードが含まれており、【看護における情報共有の大切さ】と命名した。

2. サブグラフが示す学生の看護観（表 2）

学生の看護観は、サブグラフ 01【コミュニケーションや看護援助を通した患者理解の重要性】から《対象理解の重要性》、サブグラフ 02【患者の個別性に合わせた看護技術の必要性】から《個別性に合わせた看護技術の必要性》、サブグラフ 03【患者のバイタルサインの値や、体調の変化を確認することの必要性】とサブグラフ 06【患者の状態を観察し知ることの大切さ】から《患者状態のアセスメントの必要性》、サブグラフ 04【清潔援助や環境整備などの援助における安全・安楽の重要性】、サブグラフ 05【学内での演習とは異なる病院での援助方法を見学し、学ぶことの必要性】、サブグラフ 07【安全・安楽な入院生活への援助】から《安全・安楽な看護技術の重要性》、サブグラフ 08【看護における情報共有の大切さ】から《情報共有の大切さ》の 5 つに大別された。

VIII. 考察

1. 抽出された看護観について

基礎看護学実習Ⅰを履修した学生の実習後レポートを分析した結果、抽出語の出現回数において「学ぶ」72回、「考える」59回、「理解」50回、「知る」21回、「分かる」13回といった学習を示す言葉が多く見られており、看護観として《対象理解の重要性》、《個別性に合わせた看護技術の必要性》、《患者状態のアセスメントの必要性》、《安全・安楽な看護技術の重要性》、《情報共有の大切さ》の5つに大別された。本研究の結果より、学生は4日間の臨地実習を通して多くの学びを得て、そこから看護観を形成していたと考えられる。

富田ら²⁾は、基礎看護学臨地実習Ⅰで捉えた看護観として、カテゴリー「対象を1人の人として理解する」、「対象を理解するための観察の意味」やサブカテゴリー「看護援助を通して観察していく」が得られたこと、カテゴリー「看護援助のあり方」の中でサブカテゴリー「患者の個別性を捉えた援助の大切さ」や「患者の自立を考えた援助の大切さ」が示されたこと、カテゴリー「チーム活動のあり方」の中でサブカテゴリー「医療チーム全体の連携が看護には大切である」が得られたことを報告している。これらのカテゴリーは、本研究で明らかになった看護観《対象理解の重要性》および《個別性に合わせた看護技術の必要性》、《情報共有の大切さ》と関連している内容であった。本学の学生も、臨地実習での患者との関わりや指導者が行う援助の見学および学生自身による実施を通して、主観的・客観的情報から患者の状態を観察し把握することの大切さや、患者の個別性に合わせた援助の必要性について学びを深めていたと考える。また、学生は患者との関わりだけでなく、看護師同士の関わりや、他職種との関わり

を見学することで、情報共有の大切さについて学習し、看護観として自覚していたと考える。

また、今井ら⁵⁾が基礎看護学実習Ⅰを通して学んだ看護をレポートから分析した研究ではカテゴリー「患者のニーズと個別性に合う看護」の中でサブカテゴリー「患者の情報を正確にとらえ根拠に基づいたアセスメント」が得られたことや、カテゴリー「安全・安楽・自立・効率性を考えた看護」の中でサブカテゴリー「患者の安全・安楽を考えた医療の提供」が得られたことを報告している。これらのカテゴリーは、本研究で明らかになった看護観《患者状態のアセスメントの必要性》および《安全・安楽な看護技術の重要性》と関連している内容であった。本学の学生は、指導者が行う看護援助の見学や学生自身による看護援助の実施にあたり、コミュニケーションや観察を通して得た情報はアセスメントすることが大切で、それを踏まえて、個別性に合わせた看護技術を安全・安楽という視点で計画し実施することの重要性を理解し、看護観として実感していたと考える。

以上、本研究で得られた学生の看護観は先行研究の知見と同様であり、従来の知見を支持するものであった。

2. 看護観を育成する教育方法について

本研究で得られた《対象理解の重要性》、《個別性に合わせた看護技術の必要性》、《安全・安楽な看護技術の重要性》という看護観は、本実習の目的である「看護の対象である患者と患者を取り巻く環境を理解し、日常生活の援助技術を体験する」と関連する。富田ら²⁾は基礎看護学臨地実習Ⅰの実習目標と一致した看護観

が学生のレポートから抽出されたことを報告しており、本研究とも一致する。実習目標に関する看護観が得られたことは、臨地実習が始まる前から教員間、指導者間で実習目的や目標、方法等を十分に共有し教育できた結果と考える。一方で、学生は実習中、指導者以外の看護師とも関わる。看護観への影響人物の有無を分析した研究⁶⁾では、1年生の8割程度が患者だけでなく教員、指導者、指導者以外の看護師との関わりが看護観に影響したことが報告されており、指導者以外の看護師との実習内容についての共通理解が必要と考える。今後は指導者だけでなく、指導者以外の看護師とより協働して、学生の実習目標の達成に向けて指導し、学生の看護観を高めていくことが重要であると考ええる。

また、本研究で得られた《患者状態のアセスメントの必要性》、《情報共有の大切さ》という看護観は本実習の目的に含まれていない内容であり、学生は、看護師が看護上の問題解決の過程として行っている看護過程（アセスメント・看護診断・看護計画の立案・実施・評価）の要素や、看護実践上で必須となる他職種連携の重要性といった本実習の目的以外の内容も学んでいたと考える。実習目的以外の内容を学んだことは、学生が実習中に様々な現象をよく観察し、考えを深めていた結果だと推察する。実習は、体験による知識の確認や内面化を目的とするだけでなく、これから学習する講義や演習内容の理解の促進、定着に繋がると考えられ、本実習が看護学生としての今後の学びを深めていくにあたっての土台になったと考える。

笹野ら⁷⁾は、学生が「授業中は実習のイメージが湧かず実習中は授業を振り返ることができない」ため基礎看護学の授業内容と

臨地実習での看護実践を結び付けられなかったことを報告しており、学生の学びを促進し、看護観を高めるためには、実習中の関わりはもちろん、学内での行われる講義・演習から介入していくことが重要と考えられる。より意図的に看護観を高めていけるよう、入学後より始まる各講義科目、各技術の修得や看護過程の展開をする演習科目の中で、より臨床の場がイメージできるように、教員間で検討しながら授業内容を洗練させていくことが必要と考える。

IX. 結論

本研究の結果、以下のことが明らかになった。

1. テキストマイニングによる分析の結果、基礎看護学実習 I(生活援助技術の実践)を履修した学生の看護観が明らかになった。
2. 学生の看護観は《対象理解の重要性》、《個別性に合わせた看護技術の必要性》、《患者状態のアセスメントの必要性》、《安全・安楽な看護技術の重要性》、《情報共有の大切さ》の5つに大別された。
3. 本研究で得られた学生の看護観は先行研究の知見と同様であり、従来の知見を支持するものであった。

X. 研究の限界と今後の展望

看護教員にとっては学生の看護観を分析し、教育の効果や課題を検討することは、教育方法を改善するうえで重要と考える。今回の調査は、一部の学生レポートの分析であることから、他にも

看護観が存在する可能性がある。今後は同様の調査を重ね、より多くの学生の看護観を分析することで、実習における学習効果や課題を明確にすることが必要である。

また、看護学生の看護観は入学後の漠然としたものから、看護学の講義・演習・実習での経験を積み重ねることで、より専門的・実践的な内容を表した看護観に変化することが報告されている⁶⁾^{8) 9)}。そのため、2年次に履修する基礎看護学実習Ⅱ（看護過程の展開）や各領域実習、総合実習を終了した時点での同一学生の看護観を分析することで、看護観の経年変化を継続して検討していくことが望ましい。

謝辞

本研究にご協力いただきました学生の方々に心より感謝いたします。また研究計画の立案にご助言いただきました、つくば国際大学 医療保健学部看護学科 大槻優子教授に心より感謝申し上げます。

文献

- 1) 薄井坦子：科学的看護論．第3版．日本看護協会出版会，東京．56-63，1997．
- 2) 富田幸江，小林たつ子，寺田あゆみ：基礎看護学臨地実習Ⅰで捉えた看護学生の看護観に関する検討-看護観レポートからの分析-．山梨県立看護大学短期大学部紀要．9：61-74，2003．
- 3) 小田亜希子，武藤雅子，小林幸恵・他：看護大学生の看護観に関するテキストマイニングを用いた分析．活水論文集．3：3-

21, 2015.

- 4) 樋口耕一, 中村康則, 周景龍: KH Coder OFFICIAL BOOK II 動かして学ぶ!初めてのテキストマイニングフリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析-. 初版. ナカニシヤ出版, 京都. 115-127, 2022.
- 5) 今井恵, 松永早苗, 千田美紀子・他: 基礎看護学実習 I における学生の学び-レポートの分析-. 聖泉看護学研究. 4: 39-46, 2015.
- 6) 川島悠, 村中陽子: 看護大学生の看護観の学年別特徴と関連要因に関する研究 テキストマイニング分析を通して. 医療看護研究. 17: 1-12, 2021.
- 7) 笹野幸治, 渡邊和信, 影山孝子・他: 基礎看護学の授業内容と臨地実習での看護実践との結びつきに関する学生の認識. 順天堂保健看護研究. 9: 41-51, 2021.
- 8) 近藤裕子, 近藤美月, 岩本真紀・他: 看護学生の1年学習した成果としての看護の認識. JN: The Journal of Nursing Investigation. 2: 44-55, 2004.
- 9) 木村裕美子, 三上れつ: 看護学生の看護観の変化 入学当初と看護見学実習後の比較. 中部大学生命健康科学研究所紀要. 15: 56-64, 2019.

表 1. 実習後レポートにおける頻出語（上位 60 語）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
患者	236	方法	17	知識	10
看護	108	環境	16	提供	10
援助	91	課題	15	入院	10
学ぶ	72	日常	14	変化	10
コミュニケーション	62	見学	13	感じる	9
考える	59	病院	13	自立	9
必要	55	分かる	13	疾患	9
理解	50	ケア	12	出来る	9
行う	36	安楽	12	病棟	9
実習	35	確認	12	物品	9
生活	34	清潔	12	アセスメント	8
状態	33	演習	11	異常	8
観察	28	応じる	11	関係	8
重要	27	行動	11	協力	8
大切	27	合わせる	11	今後	8
知る	21	自分	11	根拠	8
測定	20	異なる	10	信頼	8
バイタルサイン	19	共有	10	整備	8
安全	18	個別	10	正常	8
技術	17	時間	10	適切	8
情報	17	声	10		

表 2. 基礎看護学実習 I(生活援助技術の実践)を履修した学生の
看護観

看護観	サブグラフ
対象理解の重要性	01【コミュニケーションや看護援助を通した患者理解の重要性】
個別性に合わせた看護技術の必要性	02【患者の個別性に合わせた看護技術の必要性】
患者状態のアセスメントの必要性	03【患者のバイタルサインの値や、体調の変化を確認することの必要性】 06【患者の状態を観察し知ることの大切さ】
安全・安楽な看護技術の重要性	04【清潔援助や環境整備などの援助における安全・安楽の重要性】 05【学内での演習とは異なる病院での援助方法を見学し、学ぶことの必要性】 07【安全・安楽な入院生活への援助】
情報共有の大切さ	08【看護における情報共有の大切さ】

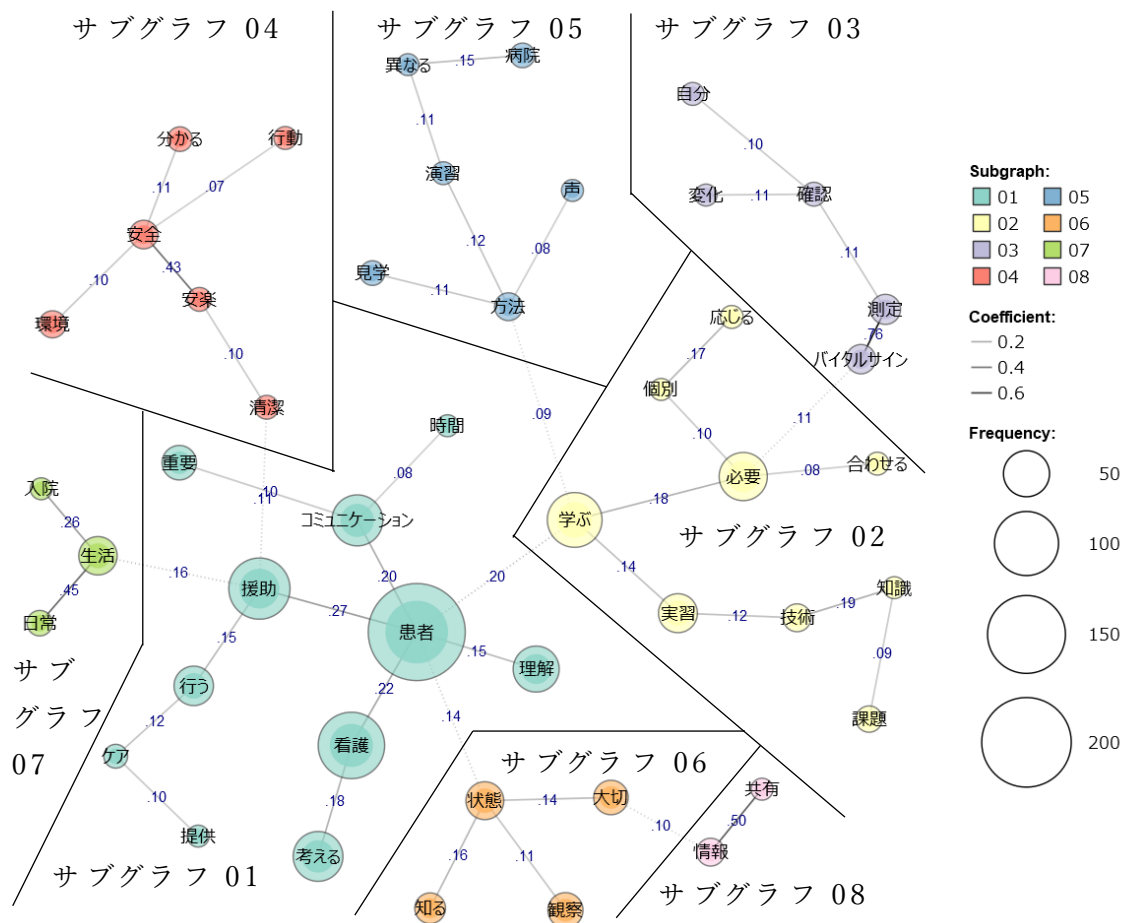


図 1. 基礎看護学実習 I(生活援助技術の実践)を履修した学生の実習後レポートが示す看護観についての共起ネットワーク